# 静岡新聞社 第30回「読者と報道委員会」

静岡新聞社の「読者と報道委員会」は7日、第30回会合を静岡市駿河区で開いた。議題は外国人の就労や共生をテーマにした「外国人財しずおか」と、昨秋に開催された「ラグビーワールドカップ（W杯）日本大会」。フォトンバレーセンター長の伊東幸宏委員、聖隷福祉事業団理事常務執行役員の鎌田裕子委員、弁護士の近藤浩志委員の3氏が本社側と意見交換した。（進行は狭田雅宏編集局長）

近藤　浩志委員

こんどう・ひろし　1996年弁護士登録。2017年静岡県弁護士会会長。日本司法支援センター法テラス沼津支部長、沼津人権擁護委員協議会会長。明治大法学部卒。東伊豆町出身、沼津市在住。

伊東　幸宏委員

いとう・ゆきひろ　1990年静岡大工学部助教授、同大情報学部教授、情報学部長を経て2010年から16年度末まで同大学長。17年度からフォトンバレーセンター長。県教育委員。早大大学院修了。工学博士。東京都出身、浜松市在住。

鎌田　裕子委員

かまた・ゆうこ　聖隷浜松病院などで看護師として勤務後、聖隷福祉事業団で人材開発部長などを歴任。2017年1月から同事業団常務執行役員。19年6月から理事。浜松医大大学院修士課程修了。掛川市出身、浜松市在住。

## 外国人財しずおか

### 共生の道探る姿勢 共感

近藤委員

### 地域交流 好例紹介して

伊東委員

### 違いや定着課題 整理を

鎌田委員

外国人労働者の受け入れ拡大に向けた改正入管難民法が2019年4月に施行され、県内でも外国人との共生が課題になっています。就労や教育、生活などの課題を掘り下げ、どのように地域の活性化につなげていくべきか考えることを目的に「外国人財しずおか」のシリーズを展開しています。

鎌田委員　聖隷福祉事業団では経済連携協定（EPA）に基づく介護人材や留学生を受け入れており、当事者として関心を持って読んでいる。介護分野の外国人材に関する連載記事では、主にEPAと介護福祉士候補の留学生、技能実習生、特定技能の4分野について取り上げているが、さらに日系人などの定住者も含めた五つの枠組みで考える必要がある。一概に外国人材といっても受け入れる制度や資格によってスキルが異なり、教育など課題もさまざまだ。実務当事者は理解していても、実際に施設などで外国人材と接する一般の方がその違いをどこまで理解できているのだろうかと感じる。複雑な制度の仕組みや日本人を含めた定着の課題を、もっと県民に分かりやすく整理して伝えてほしい。

伊東委員　国内の人口減少が進む中、従来の生産性を維持していくためには労働生産性の向上と共に、外国人の登用は重要なテーマ。今回記事を通し、新たな受け入れ制度が人手不足を背景に見切り発車的に進み、制度のひずみが生じていると感じた。こうした側面を丁寧に追い掛け、課題を掘り下げていくことが新聞社の使命だろう。また、外国では移民排斥の動きもある。そうした潮流や人々の視点についても記事で紹介してほしい。

近藤委員　共生社会は外国人について日本人が理解を深め、互いに尊重し合う気持ちがなければ実現できない。「外国人財しずおか」シリーズの「財」の文字には相互理解を深め、共生への道筋を探りたいという思いが込められていると感じた。昨今、コンビニなどで働く外国人を目にする機会が増えているが、記事を通じて学費を稼ぐために週28時間という短い時間制限の中でアルバイトしている留学生だったと知ることができる。どんな人たちがどんな志で日本に来ているのか、理解を深めるための記事が多く取り上げられている。ベトナムとインドネシアでのルポでは、人材を送り出している現地での採用の様子を興味深く読んだ。日本へ子どもを送り出す親の気持ちを取材した記事では、どの国でも子を思う親の気持ちは共通だと親近感がわいた。

2019年の統一地方選、参院選では、外国人集住地域での教育問題や人手不足が深刻な現場での外国人材への期待など、選挙に関連した地域課題を探る記事を紹介しました。外国人材のテーマを読者に身近な話題として伝え、共生につなげていくにはどうしたらいいでしょうか。

伊東委員　浜松まつりで留学生のたこ揚げ参加を受け入れている自治会の取り組みなど、地域との交流の好事例を集めて紹介してはどうか。日本で給料は稼げたが精神的につらい思いをした、という外国人ばかりでは長期的にはマイナス効果しか生まれない。共生を模索する身近な取り組みを広く知ってもらうことに意義がある。

近藤委員　海外ルポに期待したい。日本で働く外国人の出身国に記者が実際に足を運び、その土地の環境や風土、法制度、現地の人たちは日本をどう見ているのかなどを取材した記事は、読者に身近な話題として感じられるのではないか。

鎌田委員　外国人労働者とひとくくりにせず、一人一人に異なる背景があることを感じられる記事を求めたい。共生のためには言語だけでなく、宗教や慣習、マナーの違いなどについて私たち日本人が学び、理解する必要がある。日本で働く外国人だけでなく、現地の教育機関などの情報も発信してほしい。また、日本で就労した後に母国に戻った人の現地での様子を追う取材なども期待したい。

伊東委員　イスラム圏からの外国人が増えているが、日本の学校教育ではイスラム文化について学ぶ機会は少ない。世界情勢を含め、お祈りや食事などさまざまな戒律があるイスラムについて読者が学べる紙面を提供してほしい。

■外国人財しずおか　法改正を機に県内経済への影響から政治、教育、社会分野まで幅広く展開した。新たな在留資格「特定技能」が初年度の政府見込みを大幅に下回るなど、急仕立ての制度は不備も多い。従来の技能実習制度の問題点も含め、改めて丁寧に追い掛けたい。

県内で暮らす外国人をより理解する上で、彼らの母国の状況や宗教、人生設計などについて幅広い手法で取材する必要性を感じる。外国人に関わる地域の好事例や問題も、その背景を含めた記事が読者の理解には欠かせない。

今後も継続的に取材し、外国人の方々とつくる共生社会の在り方を伝えていく。

（「外国人財しずおか」プロジェクトチーム）

## ラグビーW杯日本大会

### 競技継続検証 生かして

伊東委員

### 写真の力 大会盛り上げ

鎌田委員

### 国籍の違い 超えた感動

近藤委員

アジア初のラグビーW杯日本大会が昨年9～11月に日本で開催され、県内では袋井市のエコパスタジアムで1次リーグ4試合が行われました。ラグビーに関する読者の素朴な疑問に答えるコーナーや運営準備の検証、出場国の出身者に自国のラグビー熱を語ってもらうインタビュー企画など、大会前から多角的な報道を展開しました。

近藤委員　2015年の前回大会で日本が南アフリカに勝ったときは燃えたが、その後は大きな盛り上がりもないまま本番を迎えた。今紙面を見返してみると、大会前から「どう盛り上げようか」という視点で苦心していたと思う。

鎌田委員　2年ぐらい前からエコパスタジアムのナースボランティアの事務局を務めた。その時は（W杯が）偉大なものという印象がなく、もっとルールを知っていたら本番は2、3倍楽しめたのかなと後悔している。大会中の浜松の飲食街は欧米人が多く、すごい効果だった。

伊東委員　準備の段階から丁寧に追い掛けたのは良かった。一番いいなと思ったのは写真。迫力のある場面を切り取っている。一瞬を切り取れるのは新聞ならではの見せ方だ。県内の高校はラグビー部が少なく、中学はもっと少ない。この競技は学校の部活動ではないスタイルで進めていくモデルになればいいと思う。教員の働き方も問われており、地域でもり立てていくことができれば。大会後の検証記事「競技継続へ環境整備を」は参考になった。

東京五輪・パラリンピックが控えていたこともあり、写真の中に見出しを入れたりして大胆な紙面づくりを試みました。率直な意見をお聞かせください。

鎌田委員　静岡新聞がこういう記事の見せ方をしたのはいいと思う。写真のインパクトが伝わり、大会をさらに盛り上げるような形になった。

伊東委員　会場の雰囲気を素直に伝えようとして、このような紙面になったと思う。

近藤委員　同感だ。

東京五輪・パラの報道に向けてのご期待があればお聞かせください。

伊東委員　メダルの数がどうこうという報道はやめにして、W杯で試合に敗れたアイルランド代表が勝者の日本代表をたたえた品位ある行動のような側面を切り取ってほしい。スポーツマンシップや、世界の祭典としての価値を伝えてほしい。

近藤委員　W杯日本代表は半分ぐらいが外国出身だが、違和感なく日本の国民も受け入れた。これが共生社会なのかなと思う。試合が終われば敵であっても尊重し、一つの目的に向かって互いに助け合っていく。ラグビー文化は素晴らしく、外国出身かどうかを超越した感動があった。五輪・パラでは伊豆で行われる自転車競技を深掘りしてほしい。

鎌田委員　五輪もパラもスポーツが世界を活性化する祭典であり、人々を元気にするものだと思っている。日本を、世界を元気に明るくするためにいい情報提供を期待したい。

## 編集局から

■ラグビーW杯日本大会　日本代表が袋井市のエコパで強豪アイルランドを破って史上初めて8強入りし、「にわかファン」急増など社会現象を起こしたラグビーW杯日本大会。運動部を中心に取材部門と整理部門を横断的に組織したプロジェクトチームは、アジア初開催の歴史的イベントを開幕約1年前から多角的に取り上げた。開幕後は、決定的瞬間を捉えた写真を生かした大胆な紙面構成で、試合会場の興奮を読者に伝えようと試みた。

ノーサイドの精神といったラグビー文化が県内に根付くか注目していくと同時に、今回の紙面展開の経験を基に夏の東京五輪・パラリンピックに向け、読者を元気づけるスポーツの力に焦点を当て、共生社会の在り方も問い掛けていきたい。

（ラグビーW杯プロジェクトチーム）